



地域日本語シンポジウム まちの日本語プラットフォーム2020

外国人・日本人が語る

「日本語でのコミュニケーション」

～ともに暮らし・ともに働く～

外国出身者の増加・定住化が進み、日常の暮らしで、多文化を背景にしたやりとりが行われています。誰もが活躍できる地域づくりにむけ、日本人・外国人・活動分野の異なる人たちが行き交い、さらなる行動のきっかけを得られることを目指し、今の横浜での多様なコミュニケーションのありようを、現場から学びます。

2020年12月19日（土）

日時
10:00～12:00 **第1部 シンポジウム**
12:00～12:30 **第2部 交流タイム**

会場
オンライン（Zoom）
URLは申し込んだ方に送ります

**参加費
無料**

対象
横浜市内在住・在勤・在学・活動の方
80名（先着順）

基調報告・
コーディネーター 「多文化共生社会に向けて、私たちがいま考えること」
岩田 一成さん（聖心女子大学日本語日本文学科教授）

事例発表
（発表順） 「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」
趙 春梁さん（中国出身）
村上 直子さん（サロン・デ・チャルラス 青葉代表）
ラナ タハさん（シリア出身）
増尾 和行さん（社会福祉法人たちばな会・特別養護老人ホーム天王森の郷）
レ・テイ・ホさん（ベトナム出身）

申込み 裏面参照

TEL 045-222-1173

主催：公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE） MAIL f-student@yoke.or.jp

（よこはま日本語学習支援センター）

URL <https://www.yokeweb.com/>

申し込み

メールフォームにてお申込みください。

12月4日（金）0:00受付開始

（QRコードあり）

<https://ws.formzu.net/dist/S91832237/>



プログラム

（予定）

第1部 シンポジウム 10:00～12:00

基調報告「多文化共生社会に向けて、私たちがいま考えること」

岩田 一成さん

事例発表「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」

報告1「学校や地域で」 趙 春梁さん

報告2「親子で」 村上 直子さん ラナ タハさん

報告3「職場で」 増尾 和行さん レ・ティ・ホさん

登壇者によるディスカッション

第2部 交流タイム 12:00～12:30

小グループに分かれての、参加者同士の交流タイムです。

みなさんのプロフィール

岩田 一成（いわた かずなり）さん

専門は日本語教育学。大学院生のときからボランティア日本語教室に関わる。「やさしい日本語」関連の研究に関わる一方、ライフワークとして変な公用文や公共サインをコレクションしている。著書に『読み手に伝わる公用文——〈やさしい日本語〉の視点から』『やさしい日本語で伝わる！公務員のための外国人対応』（共著）など。

村上 直子（むらかみ なおこ）さん

世界中の母親と子どもたちがおしゃべりしながら友だちになる「サロン・デ・チャルラス青葉」代表。1984年、インドシナ難民の方達への生活支援とアフターケアとしての日本語支援を始める。以来、様々な世代の外国人・日本人とともに、日本語を学び語り合う場を作ってきた。今も地域日本語ボランティアの役割とは、を考えながら、地域の共生の実現をテーマに活動を続けている。

増尾 和行（ますお かずゆき）さん

社会福祉法人たちばな会・特別養護老人ホーム天王森の郷サービス事業部介護課長。10年前に初めて在日外国籍介護スタッフを受け入れ、介護技術と日本語学習指導を担当。以来、これまでに4か国14名の在日外国籍スタッフ、2か国5名の留学生などへ日本での生活や、介護の仕事について指導をしている。

趙 春梁（ちょう しゅんりょう）さん

中国遼寧省出身。2002年来日。小学生2児の父。外国につながる子どもの多い小学校で、PTAに積極的に参加し、餃子をふるまうイベントを開催したり、翻訳サポーターをしたりするなど交流に努める。また、地域の子ども会でも活躍中。現在みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ地域コーディネーター。

ラナ タハさん

シリア出身。国では建築家をしていた。ご主人と3人の男の子と暮らす。8年前にサロン・デ・チャルラスと出会う。日本で自分の文化を伝えたいと、ノートの表紙などの紙に糸で幾何学を描くオリジナルの技法「円と線、イスラーム幾何学模様」の作品作りに取り組んでいる。

レ・ティ・ホさん

ベトナム出身。特別養護老人ホーム天王森の郷 介護スタッフ。2004年来日。小学生一児の母。子どもの頃から憧れていた『人を助ける仕事』がしたく、この夏に一念発起。長く勤めていたクリーニング店を退職し、介護士を志す。現在は働きながら資格取得を目指している。育児・仕事・勉強と目が回る毎日だが、大きな夢に向かって取り組んでいる。

